

# 会 報

第 14 号

「 今井研・卒研究生の会 」

2010.9.30

## 目 次

頁

1 . 巻 頭 文 . . . . .	今井哲二 先生 . . . . .	2
2 . 電算写植システム ( その 3 ) . . . . .	小野沢賢三 . . . . .	3
3 . 再び原点に戻って . . . . .	今井哲二 先生 . . . . .	13
4 . 塚本 一義さん からの来信紹介 . . . . .	今井哲二 先生 . . . . .	15
5 . タイ人の時間感覚と責任感 . . . . .	黒田裕允 . . . . .	21
6 . 第八回 ( 最終回 ) 懇親会 と決定事項 . . . . .		24
7 . 今井先生による 付 録 . . . . .		29
8 . 編 集 後 記 . . . . .		34
9 . 集 合 写 真 . . . . .		34

## 1. 巻頭文

### 望外の再会

### 今井哲二

多分、この会の会員の方々との再会は、2~3 の例外を除けば、皆さんが大学卒業後就職された当時に下さった年賀状が原点になっている、と思う。昭和30年から昭和40年にかけて、当時の日本電信電話公社・電気通信研究所の私の研究グループで卒業研究をされたの方々によってこの会は構成されている。



倉本敏雄さんの御努力により「会員名簿」が作成された経緯や、当初、年一回の「懇親会」が持たれ、年二回の「会報」が継続的に発行されたこと等々、この会の歩みについては思い出が尽きない。

上記、電気通信研究所（略称“通研”）の研究者は事務部門も含め、ピーク時には3,000人を越すまでになり（昭和40年代）その頃は通研と言えば武蔵野にあった、あの“電気通信研究所”だけであった。後日、通研は四ヶ所に拡大していき、それぞれに置かれた場所を冠する地名がつけられ、武蔵野通研・茨城通研・横須賀通研・厚木通研と呼ばれるようになった。

本会会員の諸兄が卒業研究をされたのは、この通研が未だ武蔵野にしかなく、まさに通研が飛躍的拡大へと向かう過渡期にあった。皆さんが努力された「卒業研究」の一つ一つが、この通研の飛躍的拡大に多少なりとも寄与されたことを敢えてここで指摘し、その貢献を誇りに思っている。

昭和30年頃は、未だ電子管の研究も我々は行っており、日本の通信回線の「信頼性の高さ」は、回線網のキー・デバイスである電子管の超高信頼性に大きく依存するものであった。私達は直接的にこの研究を担当し、大きな成果を挙げた。また、過渡期として、冷陰極電子放出や直接発電の研究にも取り組んだ。これらは、今現在にも生きる古くて新しい研究テーマでもある。

エサキダイオード（E.D）の発明を受けて、これを実用通信回線に導入すべく、日本では最大の研究グループが我々に対して通研幹部が与えた。ヘビードープ半導体単結晶の製作からデバイス作製とその特性評価、そしてその諸特性の国際規格制定まで、日本では中心的活動部隊として、極めてアクティブに活躍した。これらの成果の一部は、昭和39年4月号の『電気通信学会誌 エサキダイオードとその応用・特集号』に早くも紹介されている。

エサキダイオードに関するこれらの仕事は、後日、NTTが光通信技術の実用化へと移行するキッカケともなった「化合物半導体デバイス」の研究で、日本を牽引する中心的役割を私どもの研究室が担う時代へと大きく伸びていくことに繋がった（『日本のエレクトロニクスの源流』を参照されたい）。

通研OBの会の事務局長を務めた稲垣伸夫氏（NTTアフティ元社長・元NTT電子応用研究所所長）に言わせれば、『“通研”というところには多数の優れた研究者が薙いており、通研外の大学より卒研究生を引き受けた例は珍しくはなかった。しかし、その「卒研」を行った時から30年~40年の歳月を経て、当時の卒研究生・三十数名が再び「卒研究生の会」を作り、当時の通研指導者と共に定期的な「懇親会」、さらには「会報」まで発行している。そうした麗しい「会」が他にも存在することを私は知らない』とのことである。

こうした「稀有な会」も閉じることになった。前号会報にも書いたが、“始めのあるものは終わりがある”。この厳粛な事実を素直に受け止め、皆様方と“望外の再会”を果たせた、この10年近い歳月に心から感謝したい。

壮年時代の、すべてに前向きであった当時を想い起こさせて頂き、有難う。細切れであった、あのこと・このことも「会報」を通して繋がったことは、貴重であった。会員諸兄のその後の歩みも「会報」という形で文章に残せた事実は素晴らしいことであり、嬉しい限りである。毎号の「会報」発行に当たり、編集の労をとられた坪井孝光幹事共々、ここに深甚の謝意を表したい。

会員諸兄のこれからの御多幸を切に祈り、最後の「会報」へのご挨拶と致します。

平成22年（2010年）9月初旬、記録的な猛暑の合間に。（修正稿と写真：11月初旬）